

足紋 身元特定へ新たな一歩



足紋はガラス台に足をのせるだけで採取可能で、わずか1分弱で完了した。10月、神戸市中央区

阪神大震災 28年

10月、神戸市内で初開催された国内最大級の防災イベント「ほつさいごこたい2022」。防災啓発の展示などが並ぶ中、同協会が足紋採取の体験会を開いて

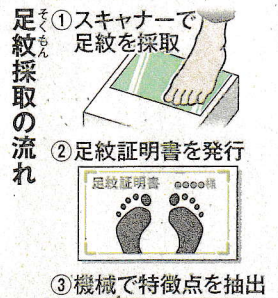
いた。足の裏に絵の具でも塗るのどうかなど考えながらブースをのぞいてみると、置かれていたのは、1台のスキヤナー。この機器のガラス台で足紋を読み取るのだという。靴下を脱ぎ、ガラス台に足をのせてぐっと踏み込む。時間はほんの数秒。1分弱で両足の採取が完了した。

足紋には指紋と同様に交わったり、途切れたりする特徴点と呼ばれる場所がある。特徴点の1千カ所以上が指の付け根あたりに集中しているという。このうち12カ所が一致すれば同一人物とみなせる。私の足紋を鑑定してもらうと、左足に726、右足に691の特徴点があった。特徴点が多いほど個人の識別がしやすいのだという。

足紋は、簡単に短時間で採取でき、コストがかからない。特徴点の数が少ない指紋と比べ、本人特定がしやすく、精度も高い。なにより採取されることへの心理的な抵抗感が少ない。足の裏は、靴や靴下で守られていることが多いため、損傷しにくく、水の中で濡くなるなどしても、その特徴点は変わらないからだ。災害時だけでなく、認知症患者が徘徊した場面などでも役立つ可能性がある。元警視庁捜査1課長で、同協会の光真章理事(74)に

災害でも損傷しにくい「特徴点」

大災害などで犠牲となった人が、遺体として発見されたものの身元の特定ができず、遺族の元に帰れないケースがある。遺体の損傷が激しいことなどが理由だが、これを防ぐための新たな手法として注目されているのが「足紋」だ。指紋と同様の凹凸や模様を形成する足紋は一人として同じものがなく、損傷も免れやすい。こうした特徴を身元の特定に生かそうと取り組むNPO法人「全国足紋普及協会」（東京都）のイベントに参加し、足紋採取を体験取材した。（三場珠希）



足紋の個人識別が可能に

採取1分弱で低コスト 認知度向上へ体験会も

足紋は、簡単に短時間で採取でき、コストがかからない。特徴点の数が少ない指紋と比べ、本人特定がしやすく、精度も高い。なにより採取されることへの心理的な抵抗感が少ない。足の裏は、靴や靴下で守られていることが多いため、損傷しにくく、水の中で濡くなるなどしても、その特徴点は変わらないからだ。災害時だけでなく、認知症患者が徘徊した場面などでも役立つ可能性がある。元警視庁捜査1課長で、同協会の光真章理事(74)に

「足紋は機械で照合ができ、時間や手間がかからず、精度も高い。大規模災害時への活用新しい可能性を感じている」と評価。その上で「一人の足紋を対象に認証のためのスマートフォンアプリなどが開発されれば、普及が後押しされるのではないかと話している。杏林大医学部法医学教室の学内講師、吉田昌記氏は「足紋は機械で照合ができ、時間や手間がかからず、精度も高い。大規模災害時への活用新しい可能性を感じている」と評価。その上で「一人の足紋を対象に認証のためのスマートフォンアプリなどが開発されれば、普及が後押しされるのではないかと話している。

「特徴点」と呼ばれる場所がある。特徴点の1千カ所以上が指の付け根あたりに集中しているという。このうち12カ所が一致すれば同一人物とみなせる。私の足紋を鑑定してもらうと、左足に726、右足に691の特徴点があった。特徴点が多いほど個人の識別がしやすいのだという。

「特徴点」と呼ばれる場所がある。特徴点の1千カ所以上が指の付け根あたりに集中しているという。このうち12カ所が一致すれば同一人物とみなせる。私の足紋を鑑定してもらうと、左足に726、右足に691の特徴点があった。特徴点が多いほど個人の識別がしやすいのだという。

よると、足紋採取を体験した家族連れが「何かあって家に帰ってこれるね」と話していたという。阪神大震災から来月17日で28年。私は学生時代に防災について学び、今年記者となって神戸総局に配属された。勉強や取材を通じ、大災害時の身元確認の重要性を感じさせられた。大切な人は亡くなっていても自分のそばに戻ってきてほしいと願うものだ。平成23年3月の東日本大震災では、多くの犠牲者が津波で流され、身元不明となってしまう人も少なくない。家族を捜すため、潜水士の資格を取って海に潜り続ける遺族のことを知った。中には遺体を取り違えられてしまう不幸な事例もあった。

もつとも、足紋にも課題はある。現状は、警察など捜査機関は個人情報のため取り扱うことが認められておらず、データベース化されていない。あくまで管理は個人に委ねられている。認知度の向上も不可欠だ。同協会ではさまざまなイベントで足紋採取の体験会を開催しているほか、足紋採取の簡易キットを製作し、普及活動に取り組む。光真氏は「まずは足紋の存在を知ってもらうことが必要」としたうえで、管理について「希望者を対象にマイナンバーカードにひもづけるなどし、自治体や医療機関が管理するのが理想的だ」と話す。